比叡山寺

比叡の山なみ

比叡山は、京と近江の国境を形成しながら南北につらなる山なみです。東側（近江側）では裏日本から瀬戸内断層につらなる近江盆地、西側（京都側）では花折断層とその延長線にあたる山城盆地が陥没したため、土塁状にとりのこされたのが比叡山地です。このように土塁状にのこされてできた山を、「地塁山地」と地理学者は呼んでいます。

だからいまみる比叡山地を中心とする山膚の複雑な褶曲は、みなこうした地殻変動からのちの、風化作用という大自然のなせる永い業なのです。大地もやはり悠久壮大な時限をもって動きつづけているのです。これを地殻の輪廻と呼んでいますが、やがて、延暦4年（785）最澄によってこの山地に「人間輪廻」の実相を照らす天台の教学が開花したのです。それが比叡山の宗教とその歴史にほかなりません。つまり比叡山寺なのです。

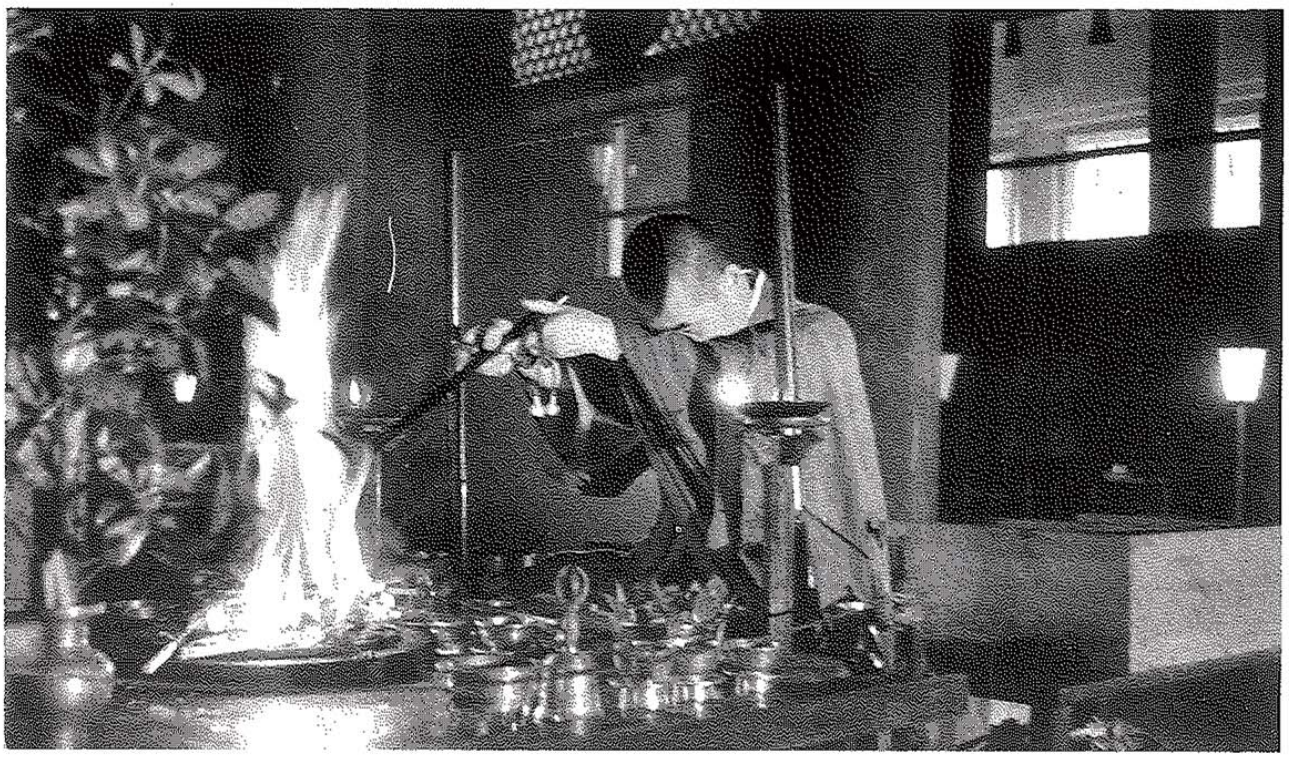
比叡山地の南端はほぼ志賀峠のあたりからはじまりますが、その中心部は五つの峯々とこれを連ねるいくつかの尾根からできており、いちばん南にあるのが四明ヶ岳(838メートル)、そのすぐ東に接して主峯の大比叡ヶ岳(848メートル）がそびえ、この二つは接近しているため眺める位置によっては駱駝の背のようなかっこうを示すので、昔から双子山とも呼ばれています。一本杉（比叡山国際観光ホテルの前）のあたりから北にふりあおぐ主峰群は、悠容せまらぬ山岳美をみせてまことに壮大です。

この大比叡ヶ岳から北へつづく尾根は、ず

▲比叡山延暦寺根本中堂

52．3．15

財団法人　滋賀県文化財保護協会



▲根本中堂内陣における神秘的な護摩作法（前野隆資氏写真）

っと北方で三石岳(675メートル)・釈迦岳（横高山、750メートル）・水井山(794メートル)などを形成しながら、仰木峠のあたりでほぼ終っています。この五つの峯々を連ねる南北の直線距離（志賀峠から仰木峠のあたりまで）はおよそ8キロメートル、ふもとのひろがり（池の地蔵越から途中越あたりまで）はおよそ10数キロメートルにおよんでいます。

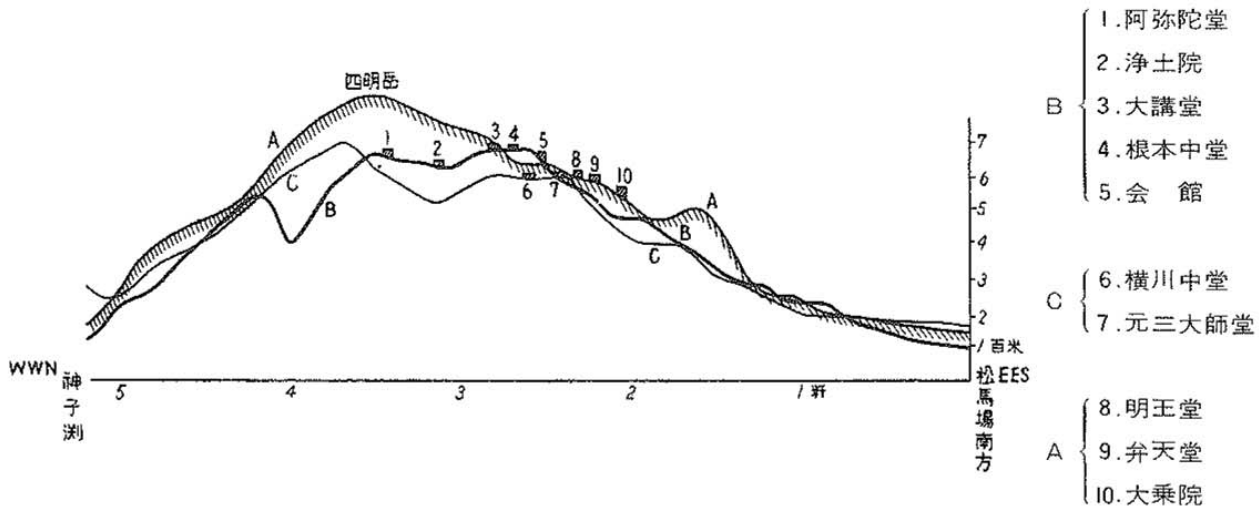
こうした山なみの全容は、京都側からは前山に隠されて見ることはできないが、近江側の琵琶湖畔に立ってながめると、はっきりと五つの峰々を連ねた「比叡山地」の全容を確認することができます。そして比叡山脈北端の山脚が、滋賀丘陵と呼ばれる台地上に終ると、やがてその北方には 1,000メートルをこえる比良山系が雄大な景観を展開します。ことに夕ぐれどき、壮大な夕映えに輝く比叡のシルエットを湖畔にたたずんで眺めていると壮厳な感傷は深く胸を打つものがあります。

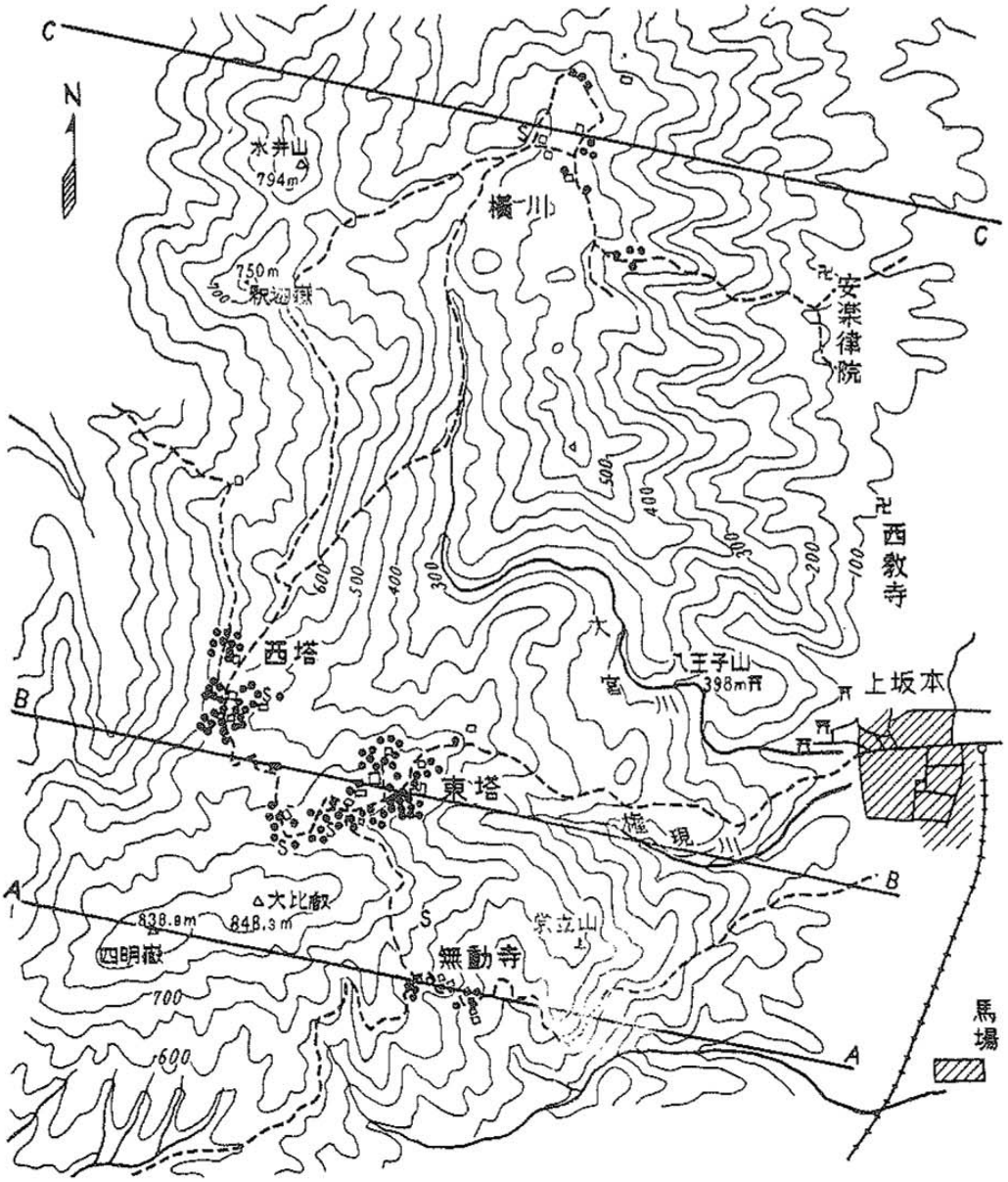
近江の湖　夕なみ千鳥汝がなけば
　　心もしぬに古おもほゆ

万葉歌人の詠嘆は、いまも山と湖が刻々と変化の相をみせながら暮れそめていく、こうしたたそがれの感懐を詠じたものでしょう。

しかしまた日本海から渡ってくる寒波が丹波山地を越えて直接に吹きつけてくるので、比叡山の冬はきわめてきびしいものがあります。また四季を通じて雨量が多く、全山は常に鬱蒼とした樹林につつまれていますが、この美しい林相が昔から聖山としての高い品格と霊山としての神秘なふんいきをたもちつづけてきた所以でもあります。

比叡山には昔からいいならわされて来た言葉に「論湿寒貧」という四文字があります。また新しく選定された琵琶湖八景の一つに「煙雨比叡の樹林」というのがあります。いずれもこうしたモンスーン的な自然条件のうえにうち立てられて来た宗教道場としての「山」の特色をとりあげているものにほかなりません。「論湿寒貧」とは「**湿**気がひどくて**寒**冷な山坊に籠り、清**貧**に甘んじて、法華経の**論**議に精をいだすべし」とする先師最澄の垂訓を示すものだと私は解していますが、籠山12か年、止観と庶邦の両業に精進することこそ、山家の学生として至高至大の心がけであることを表わすものであり、その意には秋霜烈日のきびしさを感じさせられます。「なだらかに大き尾を引きてこの谷の、くだれるかぎり杉ならび立てり」と、かつて若山牧水は黒谷の山坊に籠った時、山上樹林の景観をこう詠





（注）
A、B、Cは断面の個所

▲比叡山の三塔（黒点は山坊の跡）と高低比較（小林博氏原図）

じていますが、美しい自然とそのうちに宿されたきびしさこそ、また比叡山寺の宗教とそのこころを示すものであると思います。

三塔・十六谷

山上における宗教の場は、山の尾根や谷間の平坦地をたくみに利用して伽藍や僧坊を営んでいますが、それらは近江側のほぼ600メートル前後の場所を選んでいます。これを南から東塔・西塔・横川(北塔)の三つの地域に大別し、さらに東塔を東谷・南谷・西谷・北谷・無動寺谷、西塔を東谷・南谷・北谷・南尾谷・北尾谷と別所の黒谷、横川を香芳谷・都率谷・戒心谷・般若谷・解脱谷・飯室谷と別所の安楽谷にわけ、これを「三塔、十六谷、二別所」とよんでいます。

東塔は、根本中堂・戒壇院・文殊楼院・大講堂・法華総持院・浄土院・阿弥陀堂などの伽藍と、各谷の本堂や山坊が法燈をかかげてきました。西塔には、釈迦堂・法華堂・常行堂・相輪樑などの伽藍と椿堂・本覚院（居士林）・瑠璃堂・清竜寺など、谷本堂やいくつかの山坊が現存しています。また横川には、元三大師堂（四季講堂）・横川中堂・根本如法塔・恵心堂・元三大師御廟などのほか、定光院をはじめとする谷本堂や僧坊跡などがやはりいくつか残っています。

東塔は昔から一山の中心であり、いくつかの古い登山路もみなここに通じているし、いまもここには一山を管理運営する総本坊があります。またドライブウェイやケーブルカーの連絡地としても、やはり比叡山の中心地区を形成しています。

西塔は特別の有志以外はさほど訪れる人もなく、天然記念物に指定された鳥類の繁殖地としても静かで美しい自然環境を保持してきたのですが、奥比叡自動車参詣道の開通によって、その中間地点として今では多くの人々にその環境が楽しまれています。奥比叡自動車道の工事の際、相輪樑の西北方に数か所の山坊跡が発見されましたが、山上にはこうした遺跡が三塔ともになお数多く埋没しているものとみてよいでしょう。いわゆる比叡山三千坊のありし日の姿がしのばれます。

横川はこの西塔から尾根路をなお数キロメートルの北方にあり、奥比叡と呼ばれる宗教上の秘所ですが、ここも自動車参詣道の開通によって、いまや開放的な地域となったのです。横川は9世紀のなかごろ円仁（慈覚大師・794－864)が隠棲した草庵にその起源を発し、かつて円仁発願の根本如法経を埋めた如法塔跡からは、上東門院の発願にかかる写経や願文を納めた藤原時代の金銅経筒（国宝）などが発見されています。

恵心僧都の名で知られる源信(942－1017)もこの横川が本拠です。源信は横川に籠り、往生要集を執筆し、またここからはるか西方の山々にかかる壮大な落日を観相しつつ、山越弥陀来迎の夢幻的なイメージを体得し、浄土教芸術を創始した宗教者として知られています。またその師良源(912－985・慈恵大師または元三大師）の山坊定心坊にはじまる元三大師堂（四季講堂）は、古来元三大師信仰のメッカとして、加持祈禱の道場はいまも深い民衆信仰にまもられています。付近には恵心堂や元三大師廟（御廟）、恵心僧都の墓や覚超僧都の墓、道元禅師（1200－1253）や日蓮上人（1222－1282）が修行した庵室など山坊の跡があります。また一山の宝物館もこの横川に置かれています。

比叡山に関する古い書物をみていると、山上にはいくつかの名水や霊泉があったと伝えています。東塔西谷の弁慶水（千手水または千寿水）もその一つですが、横川にも如法水、碧玉泉、寂静水などがありました。苔むした岩間からいまも湧き出る泉は、冬は暖かで夏はしびれるように冷たく、その名の示すようにみな山の歴史を秘めて、それぞれの縁起や伝承をもって生きつづけてきたものですが、なかには水脈の変化や林相の変遷によって涸渇したり、山坊が絶えたためにその所在が忘れられてしまったものもあります。

寂静水は道元禅師の山坊寂静坊跡の一隅に

▲西塔の常行堂と法華堂

いまもひっそりと湧きつづけています。山上に起居した幾千の僧徒が、すべてこうした山の霊泉を閼伽の水として仏に捧げ、また彼等の飲み水に汲んできたことを想うと、老杉の根方にいまも湧きつづける泉に、私はつきせぬ歴史のいぶきと霊山のいのちを感じます。奥比叡はまたそうした気分が残っている所です。

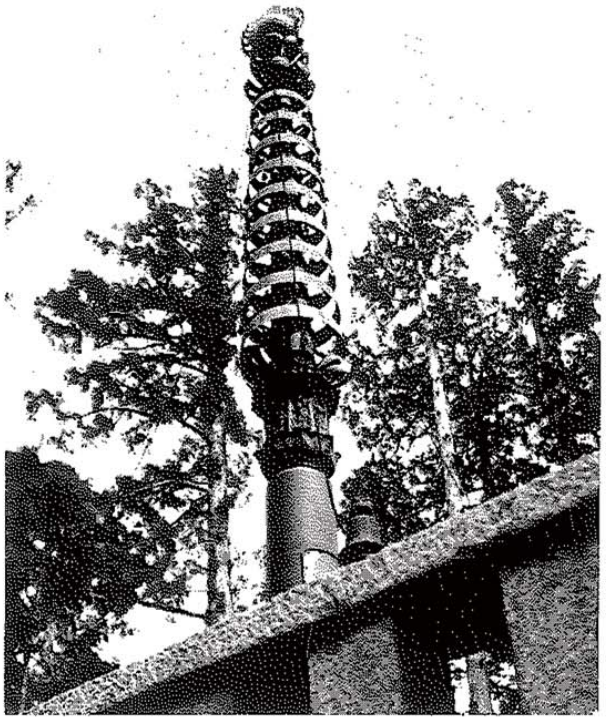
主要な堂塔伽藍

根本中堂は別に一乗止観院とも呼ばれる東塔の中心伽藍です。いまの堂は、元亀の兵乱で焼失したのち寛永19年（1642）に再建されたもので、巨大な主堂は国宝に、100メートルに近い廻廊は重要文化財に指定されています。主堂は内陣と中陣と外陣に分かれていますが、2メートル余りも低い内陣は石だたみで真暗闇、その中に最澄が点じた有名な「消えずの燈火」がいまもまたたきつづけて、壮厳と神秘な天台密教の雰囲気をただよわせています。この内陣には三つの大きな厨子があり、中央には秘仏の薬師如来を、向って右方には文殊菩薩を、左方には宗祖伝教大師の像をまつってあります。ここでは数年に一度しか行われないような伝統的な法儀のほかに、「日々不断の御修法」と呼ばれて、年中一日も欠かさずに護国の経典が読誦され、護法の護摩がたかれて、比叡山寺の 1,000年にわたる鎮護国家と台密護法の道場としての理想がきびしくまもりつづけられています。

釈迦堂は別に転法輪堂とも呼ばれて、西塔のいちばん中心をなす伽藍です。この堂も、元亀の兵乱で焼けたのち三井寺の金堂（鎌倉時代の建物）を移したもので、重要文化財になっています。近年の修理で復原すべき箇所は手を加え、彩色も改まって美しくなりました。内陣はやはり1メートル余りも低い石だたみで、中央の厨子には釈迦如来の立像（重要文化財）がまつられています。藤原時代の流麗な彫刻です。平素は秘仏で拝観できませんが、かつて私が拝観したところでは山上でいちばん美しい仏像だと思いました。

常行堂と**法華堂**は正しい名称を常行三昧堂と常座三昧堂と呼びます。宝形造の美しい堂が二つ、西塔の深い杉木立の向うにみえるのは、比叡山中ではいちばん美しい伽藍景観だと思います。伝教大師が定めた四種三昧道場のうちの二つで、昔は東塔にも、横川にもありましたが、いまは西塔にだけしか残っていません。ともに重要文化財に指定されています。いまも、盛夏ここに百日参籠してきびし

▲薄雪におおわれた横川の御廟



▲西塔の相輪樓

い座禅と行道の修業をする伝統がまもりつづけられています。

相輪樓（塔）は正しい名称を法花宝憧院と呼びます。弘仁11年(820）に伝教大師が創立した伝統をもつ建物で、やはり重要文化財になっていて西塔では古来いちばん重要な建物です。普通の塔の屋上に建っている相輪（九輪）だけを地上に建てた不思議な姿をしていますが、ストウパーと呼ばれる印度系の信仰をそのままに伝承している古式塔婆の型式なのです。ここは近江と山城の国境（塔に向って左は山城、右は近江）です。

横川中堂は崖の上にせり出して三方が舞台造りになった大きな建物です。昭和17年に焼けた江戸時代の堂をコンクリート造りで再建したものですが、その構造や形式のすべては古式にのっとっています。首楞厳院と呼ぶのが正しい名称で横川第一の大堂です。ここも中央の内陣は１メートルほど低い石だたみで、そこに聖観音立像（重要文化財）が安置されています。横川にはこのほか四季講堂や僧侶が修行する行院、元三大師の御廟や恵心僧都の廟、道元禅師や日蓮上人らの修行地など、さすが奥比叡だけあって詳しく調べて廻れば、まだまだ歴史を語る堂跡、きびしい修行をした山坊跡や 1,000年にわたる僧侶の墓地など、みちのべには歴史を語る文化財も多く、静かに懐旧の情にひたっていると、峯を渡る松風のひびきと共に万有流転の相をしみじみと味わせてくれます。自然がより美しく、より深いほど、そこで醸成される思想や哲学や芸術も、美しくまた深いのだと私は常に思っています。そういうことを思いかえさせるものが、まだ比叡山寺にはいたるところに秘められているようです。

あとになりましたが、比叡山寺と呼ぶ寺院はいまはありません。比叡山延暦寺がその名称です。しかし比叡山の自然とその宗教と歴史とが一体になっている姿、それをあえて「比叡山寺」と呼びたいのです。いうまでもなく草創期には、比叡峯寺、比叡寺、比叡山寺といった名が文献に出ています。いわゆる地名寺号なのです。昔から著名な寺にはみな地名寺号と法名寺号とがありました。例えば、斑鳩寺と法隆寺、高野山寺と金剛峯寺、荒陵寺と四天王寺など探せばいくらでもあります。私は地名寺号の中に、かえってなにか歴史と宗教と自然との深いかかわりあいといったものを感じさせられるのです。

（景山春樹氏提供）